

ゆきははなである——新野の雪まつり

野田 真吉

付記：本文は『野田真吉・ある記録映画作家の軌跡』風景社、1981年より再録したものである。再録を許可していただいた巨純吉氏に感謝をお伝えいたします。

「ゆきははなである——新野の雪まつり」は私の民俗神事芸能を題材とした記録映画三部作計画の第二作である。第一作は「冬の夜の神々の宴—遠山の霜月まつり」(七〇年)で、第三作は奥三河の「花まつり」を予定しているが、すべて自主製作なので、いつ三部作がそろるか自分でも見当がつかない。

私は戦前、東宝文化映画部に所属していた時、東北地方によくでかけた。なかでも一九四〇年、今和次郎、竹内芳太郎の指導で「農村住宅改善」という作品を演出した。その時、私は東北地方のきびしい生活の実態にふれ、同時にさまざまな民俗に接した。私は日本人の歴史や生活意識構造をすることは民衆の生活のなかに深く脈々とした軌跡を残している民俗を勉強する必要を痛感した。そのころ、同じ部にいた三木茂は柳田国男の指導のもとに、秋田県男鹿半島で「土に生きる」を撮影していた。私はそのラッシュプリントの試写をみせてもらいながら民衆の生活意識の基底を流れている未知の世界を発見する驚きをいつも感じた。私も民俗に関する映画をとってみたいと思った。だが、私は「農村住宅改善」を完成した直後、兵隊にひっぱりだされた。そんなわけで、民俗について関心をいだきはじめたが、兵隊にとられ、いつ死ぬかわからない身となった私はすべてをあきらめるほかなかった。だが、敗戦で命拾いして戦地から帰ることができた。再び、記録映画をつくりはじめた。



《この雪の下に》(1956年) 撮影風景

状況と表現のはざま

一九五六年、「東北のまつり・三部作」をとる機会にめぐりあった。私の民俗学的な関心がこの製作から再燃しはじめた。やがて六〇年から七〇年にかけての「叛乱」の時期をむかえた。私もその斗いに参加した。斗いは大きい挫折をもたらした。私はそのなかで、とくに歴史的社会的に長い間培われてきた私たち日本人の意識構造の深部をないがしろにしてはならないと思った。それは何事を見るにも、またなすにつけても大切な前提要件であると思った。そうした思いにつかれた私はもう一度、私自身をみなおすために、民俗についての勉強をしてみる気になった。その手始めに民俗的な題材の映画製作をとおして考えてみようと思った。当時の状況から(今もたいして変わっていないが)このような商売にならないことのわかりきっている映画に資金をだす者はいなかった。でも、私は今まで主人もちで映画をつくってきたなかで、いろいろな制約に苦しめられつづけてきた。私はどうせ苦しむのであれば自分で出来る範囲で自分の思うように製作した方が結果がどうだろうと諦めがつくと思った。

六八年ごろから「冬の夜の神々の宴—遠山の霜月まつり」の製作を企画した。幸い、撮影の長谷川元吉の協力をえたので七〇年正月に撮影にかかった。同年、編集、録音をして完成した。当時、高度経済成長政策のあげ潮に便乗したもののや、同政策の必然的帰結がうんだ公害や土地問題にかかわった斗争記録映画が時流であったなかに、まったくディメンションのちがったアプローチをもった私の作品は一部の人々の関心をよんだにすぎなかった。記録映画をつくっていた友人たちのなかには私が急転回して「先祖返り」の反動的逃避、敗北主義の傾向だと威勢のよい批判をする者もいた。私は後退したとも思わなかったし、もちろん前進だとも思っていなかった。初志にもどって出直しをしてみようと思ったにすぎなかった。私はいわゆる社会的、政治的な色彩のつよい斗争カンパニア風な記録映画をそれはそれとしての存在意義や価値があると思っている。私は以前、そうした映画製作にもかかわってきた。今後もそのような映画を私の納得のいく視点から私なりの斗いへの参加としてつくっていこうと思っている。「くずれる沼—画家山下菊二」(七六年)はその一つである。私は何が何でも直接的、実効的に社会問題にかかわったカンパニア映画でなくてはならないという記録映画に対する一

辺倒な考え方に組しない。人さまざまな生き方があるように、一つの方向をめざしていても、人それぞれの視点からのアプローチをもった作品があってもいいと思っている。さまざまな視点にたった作家たちの多彩な作品がたくさん作られ、いろいろな欲求をもった人々がそれらの作品を自分の欲求に即してみることが今日においては大切なことであろう。そうしたことは私たちの意識のなかにたがいにかかわりあい、濾過され、直接的、間接的に潜在化し、蓄積していくことが意識の拡充、自立性をうながし、意識の変革、ひいては状況の変革につながるエネルギー源になると思う。作品と状況との関係、作品の働き、作家の仕事はそうしたところにあると思う。要は作家が自分の作品の存在を現実とどのようにかかわらせ、また自分とかかわらせているかであろう。

以上のようなあれこれの自省や思いに至っていた私はたまたま、七〇年以降、神奈川県教育庁の文化財保護課などの映画製作にたずさわるめぐりあわせになり、十数本の民俗学的な題材の記録映画を手がける機会をえた。その間、私は民俗についての見聞をひろげ、先学たちの学問的研究の積み重ねをすることができた。同時に私は自分のつくったものが内容的にも表現的にもものたりない感じをいだきはじめた。私は自分の不満、いいなおせば私の不勉強や非力を自己暴露させ、それをのりこえるために、一度、民俗行事を真正面から自分なりに記録してみたいと思い、かねがねから企画していた「ゆきははなである—新野の雪まつり」に着手することにした。七四年のことである。もちろん、私に資金などあるはずがなかった。それまでに映像詩的な試みであった「まだ見ぬ街」や「冬の夜の神々の宴」などを自主製作した経験もっていたので時間をかければやれると思って製作にかかった。

ところで、「遠山の霜月まつり」「新野の雪まつり」「奥三河の花まつり」を三部作にしようと思ったのは中部地方の山岳地帯に我国の先史における狩猟漁撈時代（非定着生活者の時代）とつづく農耕時代（定着生活者の時代）の原初的民俗の並存、あるいは習合の痕跡がその後の歴史時代の社会構造のなかにつつまこまれながら、残存し、伝承されている地域的な条件（東京に比較的近いという地理的な条件をふくめた条件）があったからである。このことは私の課題追求にとってよい勉強の場になると思ったことが第一の理由である。次は三部作ともまつりという民俗的にはハレの場のみを選んだのは三つのまつりにまつり本然の構造や生態が今日に

おいてもまだかいまみられること、一連の神事芸能が我国の芸能史の足どりをのこしている興味など、さらに一方、まつりが数日間の撮影ですむという製作資金の考慮があったことである。だが資金の面はまったく思惑がはずれてしまった。現在も後遺症のために四苦八苦がつづいている。

映像民俗学の確立へ

この十年間ほど、比較的多く民俗行事を題材にした記録映画にかかわる仕事をしてきた私はそのなかで、まったく遅まきながら、いろいろなことを考えさせられた。たとえば現在、すでに近代化のなかに姿をかえ、失しなわれつつある自然のサイクルにしたがった農耕生活のリズム（気枯れ—死と再生の循環）ともいえるケとハレ、村落共同体意識、また、支配権力が自らの政治体制の擁護、確立のために「異神」や「異人」をとり込み、あるいは抑圧、隷属し、差別し、排除しながら共同体の支配体制をかため、共同体の幻想をうちたてていった過程などがおぼろげに私なりにわかりかけてきたように思う。私にとって、民俗的な題材を記録する映画製作はそうした「余禄」以上の余禄が私の製作意欲をかきたてた。その意味で私は余禄の「資料」蒐集的な作品活動—言い方をかえれば作品としてのかかわりあい以上に私の作品の外にあることのために作品活動をあえて、しばしばおこなうこともあった。

また、民俗的な題材の映画製作に私が心ひかれる理由には、私がまつりとか、騒乱とか、ストライキといった「さわぎごと」になると胸さわぎがしてうれしくなる素朴な、子どもっぽい心情もっていることである。気枯れ（けがれ）を払い、生気をとりもどす「まつり」と世直し的な騒乱やストライキは私の人間的自由を求める心情のなかにどっかで一脈のつながりを持っているのであろう。まつりの撮影をしていると私は気がわくわくしてくる。さらに、まつりのなかの仮面や呪術的な行事をみていると幻想的詩的なイメージにさそいこまれたりすることがある。以上のような私の志向、さまざまな趣向が民俗的な題材の記録映画をとっている私の理由といえると思う。だから、私の民俗にかかわっている映画は民俗の保存とか、民俗学研究といった大上段なものではない。私にとって資料であった作品がみる方の何かの資料になればと思っている。もし、そのようなところで寄与できれば存外の喜びである。五、

六年前から民俗学専攻の野口武徳（成城大教授）、宮田 登（筑波大助教授）、それに私と同じように民俗学的な記録映画に惹かれている映画作家北村皆雄たちと「映像民俗学を考える会」をつくって民俗学における映像記録の諸問題を話しあってきた。七七年十一月に会主催で二泊三日間の「映像と民俗学を考える研究セミナー」をひらいた。全国各地からの参加者があり、盛会であった。私たちは映像民俗学への関心のたかいことをした。そこでセミナー参加者を中心に「日本映像民俗学の会」を結成し、映像民俗学の理論と方法の研究をめざし、七八年八月発足した。私も会員の一映画作家として会の推進のために役立ちたいと思っている。



《ゆきははなである—新野の雪まつり—》

最後に、「ゆきははなである—新野の雪まつり」の完成はひとえに現地、新野の人々の協力と製作全スタッフの長期間にわたる積極的な参加援助、また、先学の方々のたえざる助言のたまものにはかならないと思っている。ここに深い敬意と感謝を捧げる次第である。

第 19 回中之島映像劇場
野田真吉の暁—配布資料をウェブに再掲
発行：国立国際美術館
資料発行日：2020 年 10 月 2 日
主催：国立国際美術館、国立映画アーカイブ